

湯島の境内

泉鏡花作

湯島の境内（婦系圖——戯曲——一齣。）

雪となり、
冴え返る春の寒さに降る雨も、暮れていつしか

假聲使、兩名、登場。

川に入谷村、
上野の鐘の音も氷る細き流れの幾曲、すゑは田

使つて歸る。
其の假聲使、料理屋の門に立ち随意に假色を

廓へ近き畦道も、右か左か白妙に、

此の間に早瀬主税、お蔦とゝもに假色使と行
逢ひつゝ、登場。

往來のなきを幸に、人目を忍びイみて、

假色使の退場する時、早瀬お蔭と立留る。

【お蔭】 貴方・・・貴方。

【早瀬】 あゝ。(と驚いたやうに返事する。)

【お蔭】 いゝ、月だわね。

【お蔭】 然うかい。

【お蔭】 御覽なさいな、此の景色を。

【早瀬】 あゝ、成程。

【お蔭】 可厭だ、はじめて氣が付いたやうに、貴方、何うかして居るんだわ。

【早瀬】 何うかもして居ようよ。月は晴れても心は暗闇だ。

【お蔭】 え、そりや、世間も暗闇でも構ひませ
んわ。何うせ日蔭の身體ですもの。 . . .

【早瀬】 お蔭。 (とあらたまる。)

【お蔭】 あい。

【早瀬】 濟まないな、今更ながら。

【お蔭】 水臭い、貴方は。 . . . 初手から覚悟
ぢやありませんか、ねえ、内證だつて夫婦ですも
の。 . . . 私、苦勞が樂みよ。月も雪もありやし
ません。(四邊を二す。)一寸お花見をして行きま
せうよ。 . . . 誰も居ない。腰を掛けて、よ。
(と肩に軽く手を掛ける。)

慥に爰と見覺えの門の扉に立寄れば、(早瀬、
引かれてあとすさりに、一脚のベンチに憩ふ。)

【お蔭】 (並んで掛けて、嬉しさうに膝に手を置
く) 感心でせう。私も素人になつたわね。

風かぜに鳴子なるこの音おと高く、

（時ときに、よう／＼と蔭かげにて二三にん人、ハタ／＼と拍はく手の音おと。）

【お蔦】（肩かたを離はなす）でも不思議ふしぎぢやありませんか。

【早瀬】何なに、月夜つきよがゝい。

【お蔦】まあ、いくら二人ふたりが内證ないしやうだつて、世帯しよたいを
持もてば、雨あめが漏もつても月つきが射さすわ。月夜つきよに不思議ふしぎは
ないけれど、恚いかうして一所いっしょにおまゐりに來きた事ことなの
よ。

【早瀬】然さうさな、不思議ふしぎと云いへば不思議ふしぎだよ、
世よの中なかの事ことは分わからないものだからな。

【お蔦】急きふに雪ゆきでも降ふらなけりや可いい。

【早瀬】（懸念けねんして）え、何故なぜだ。

【お蔭】 だつて、つひぞ一所に連れて出てくれた事が無かつたぢやありませんか。珍しいんだもの。

【早瀬】

【お蔭】 ねえ、貴方、私矢張り、亡く成つた親の情が貴方に乘憑つたらうと爲う思ひますわ。 恚うして月夜に成つたけれど、今日お午過ぎには暗く曇つて、おつけ晴れて出られない身體には丁ど可い空合ひでしたから、貴方の留守に、お母さんのお墓まゐりをしたんですよ。 飯田町へ行つてから、はじめてなんですもの。身がたまつて、生命がけの願が叶つて、容子の可い男を持つた、お蔭はあやかりものだつて、然う云つてね、お母さんがお墓の中から、貴方によろしく申しましたよ。邪険なやうで、可愛がつて、はふり放しで、行届いて。

【早瀬】 お蔭。

【お蔭】 でも、偶には一所に連れて出て下さいま

し。夫婦いっしょに成なると氣き拔ぬがして、意い地ぢも張はりもななく成なつて、たゞ附くつ着くいて在いたがつて、困こまつた田あな舎か嫁よめでございます。江え戸どは本ほん郷がうも珍めづしくつて見けん物ぶつがしたくつて成なりません。――然さうお母つかさんがことづけをしたわ。・・・何なんだか此この二に三さん日にち、鬱ふさ込ぎんで在いらつしやるから、貴あなた方たの氏うぢ神がみ様さまもおんなじ、天てん神じん様さまへおまりをなさいまし、私わたしも一いっ所しょにつて、逆ともいけなと思おもつて強ね請だつたら、恚かうして連つれて來きてくれたんですもの。草くさ葉ばの蔭かげでもどんなに喜よろこんで居あるか知しれませんよ。

【早瀬】 堪かん忍にんしな。嘘うそにも譽ほめられたり、嬉うれしがられたりしたのは、私わたしはきのふ昨日けふ、一をとひ昨日けふまでだ、と思おもつて居あるんだ。(歎たん息そくす。)

【お蔭】 何なんだねえ、氣きの弱よわい。掏す賊りの手て傳つひをしたつて、新しん聞ぶんに出だされて、・・・自じ分ぶんでお役やく所しょをし辭じ職しょくした事ことなんでせう。私わたしが云ふと、月げつ給きふが取れなく成なつたのを氣にするやうで口くち惜しいから、何なんにも口くちへは出ださなかつたけれど、貴あなた方た、此この間から鬱ふさいで居あるのは其その事ことでせう。可いいぢやありませんか。蹈ふ

んだり蹴たりされるのを見ちや、掏賊だつて助けま
いものでもない、其處が男よ。えゝ、私だつて柳橋
に居りや助けるわ。それが悪けりや世間様、勝手に
なさいな。またお役所の事なんか、お墓のお母さん
も然う云ひました。蔦がどんな苦勞でも樂みにしま
すから、お世帯向は決して御心配なさいますなつ
て、……云つてましたよ。

【早瀬】 難有い、俺ら嬉しいぜ。

【お蔦】 女房に禮を云ふ人がありますか。眞個に
何うかして居るんだよ。

【早瀬】 馬鹿な。お前のお母さんに禮を云ふのよ。
しかし世帯の事なんか、些とも心配して居るんぢや
ない。

【お蔦】 ぢや何を鬱ぐんですよ。

【早瀬】 何と云ふ事はない、が、月を見な、時々、
雲も懸るだらう。星ほどにも無い人間だ。ふつと暗

闇にも成らうぢやないか。．．．いや、家内安全の祈禱は身勝手、御無沙汰の御機嫌うかゞひにおまありしながら、愚痴を云つてちや境内で相済まない。．．．さあ、そろ／＼歸らう。（立ちかける。）

【お蔭】 （引添ひつゝ）あゝ、一寸、待つて下さいな。

【早瀬】 何だ。

【お蔭】 あの、私は巳年で、豫て、辨天様が信心なんです。．．．此處まで来て御不沙汰をしては氣が済まないから、石段の下までも行つて拜んで來たいんですから、貴方、一寸の間よ、待つて居て下さいな。

【早瀬】 あゝ、行くが可い、次手、と云つては失禮だが、お前不忍まで行つては何うだ。一所に行かうよ。

【お蔭】 まあ、珍しい。貴方の方で一所なんて、不思議だわね。（顔を見る）でも、悪い方へ不思議なんぢや無いから私は嬉しい。ですがね、辨天様は一所は悪いの。それだしね、私貴方に内證で、一寸買つて來たいものがありますから。

【早瀬】 お心まかせになさるが可い。

【お蔭】 いやに優しいわね。よしませうか、私、……よさうか知ら。

【早瀬】 何故、他の事とは違ふ、信心ごとを止しちや不可ない。

【お蔭】 でも、貴方が寂しさうだもの。何だか災難でもかゝるんぢやないかと思つて、私氣に成つて仕やうが無い。

【早瀬】 詰らん事を。災難なんか張倒す。

【お蔭】 おほ、出來した、宿のおまへさん。

【早瀬】 お茶屋ぢや無い。場所がらを知らないかい。

【お蔭】 嬉しい、久しぶりで叱られた。だけれど、
聲こゑに力ちかりがないねえ。(とまた案ずる。)

【早瀬】 早く行つて来ないかよ。

【お蔭】 あいよ。然う／＼、鬱陶うつたうしいからつて、
貴方あなたが脱ぬいだ外套くわいたうをこゝに置おきますよ。夜露よつゆがかゝる、着きた方が可いいわ。

氣轉きてんきかして奥おくと口くち。

【お蔭】 (拍手かしばてうつ。)

天神様てんじんさま、
天神様てんじんさま。

【早瀬】 何だ、ぶしつけな。

【お蔭】 (それには答こたへず。)(やどをお頼たにみ申上まをしあげます。)

【早瀬】（ほろりと泣く。）

【お蔦】（行きかけつゝ。）貴方、見て居て下さいな、石段を下りるまで、私一人ぢや可恐いんですもの。

【早瀬】それ見ろ、弱蟲。人の事を云ふ癖に。何だ、下谷上野の一人あるきが出来ない娘ぢやないぢやないか。

【お蔦】そりや褌を取つてりや、鬼が来ても可いけれども、今ぢや按摩も可恐いんだもの。

【早瀬】可し、大きな目を開いて見て居て遣る。大丈夫だ、早く行きなよ。

【お蔦】あい。

互に心合鍵に、

（早瀬見送る。――お蔦行く。――）

(背ける顔を目にて継る) あゝ(嬉しさうに) 久しぶりで逢つたやうよ。(さし覗く) 何うしたの。矢張り屈託さうな顔をして。――慥うやつて一所に來たのは嬉しいけれど、しつけない事をして、――天神様のお傍はよし、こゝを離れて途中で又、魔がさすと不可ません。急いで電車で歸りませう。

【早瀬】 お前、せい／＼云つて、些と休むが可い。

【お蔭】 最う澤山。

【早瀬】 おまゐりをして來たかい。

【お蔭】 えゝ、仲町の角から、(軽く合掌す。)
手を合せて。

【早瀬】 何と云つてさ。

【お蔭】 まあ、そんな事。

【早瀬】 聞きたいんだよ。

【お蔭】 えゝ、話すわ。貴方に御兩親はありませ
ん、其の御兩親とも、お主とも思ひます。貴方の大
事なお師匠さま、眞砂町の先生、奥様、お二方を第
一に、御機嫌よう、お達者なやう。そして、可愛い
お嬢さんが、決して／＼河野なんかと御縁組なさい
ませんやう。

【早瀬】 それから。

【お蔭】 それから？

【早瀬】 それから、・・・

【お蔭】 だつて、あとは分つてるぢやありません
かね。ほゝゝゝ。

【早瀬】 (ともに寂しく笑ふ) はゝゝ、で、何を
買って来たんだい、買ひものは。

【お蔭】 (無邪気に莞爾々々しつゝ) いゝも
の、・・・でも、お前さんには氣に入らないもの、

それでも、氣に入らせないぢやおかないもの、嬉し
いもの、憎いもの、一寸極りの悪いもの。

【早瀬】 何だよ、何だよ。

【お蔭】 あゝ、悪かった。．．．坊やお土産
を待つて居たんだよ。そんなら、何か買つて上げり
や可かつた。．．．堪忍おしよ。いゝ兒だねえ。

【早瀬】 可いから、何を買つたんだよ。

【お蔭】 見せませうか、叱らない？

【早瀬】 ．．．

【お蔭】 叱つたつて、もう買つたんだから構はな
い、（風呂敷より紙づゝみを出す。）鬚形よ、鬚
の。仲町に評判な内があるんですわ。

【早瀬】 鬚形を、お蔭。（思はず其つゝみに手を
掛く）俺の位牌でも買や可いのに。

【お蔭】 まあ、お位牌は丁と飾つて、貴方のおふた親に、お氣に入らないかも知れないけれど、私や、私ばかりは嫁の氣で、届かぬながら、朝晩おもりをして居ますわ。

【早瀬】 樹から落ちた俺の身體だ。．．．優しい嫁の孝行で、はじめて戒名が出来たくらゐだ。俺は勘當されたツて。．．．何を前、両親が前不足があるものか。――位牌と云ふのは俺の位牌だ。――

【お蔭】 えゝ。

【早瀬】 お蔭、もう俺や死んだ氣に成つて、お前に話したい事がある。

【お蔭】 (聞く)と齊しく慌しく兩手にて兩方の耳を蔽ふ。(

【早瀬】 一寸、もう一度掛けてくれ。

【お蔭】 (ものも言はず、頭をふる。)

【早瀬】 よ。(と胸に手を當て、おさうとして、火に觸れたるが如く、ツト手を引く)死ぬ氣に成つて、と聞いたばかりで、動悸は何うだ、震へて居る。稻妻を浴びせたやうに……。可哀相に……。チヨツ一層二人で巡禮でも……。いや／＼先生に誓つた上は。ーえゝ、俺は困つた。何うしよう。(倒るゝが如くベンチにうつむく。)

【お蔭】 (見て、優しく擦寄る)聞かして下さい、聞かして下さい、私や心配で身體がすくむ。(と忙しく)早く聞かして下さいな。(と靜に云ふ。)

【早瀬】 俺が死んだと思つて聞けよ。

【お蔭】 可厭。(烈しく再び耳を壓ゆ)何を聞くのか知らないけれど、貴下此二三日の様子ぢや雷様より私は可怖いよ。

【早瀬】 (肩に手を置く。)やあ、眞個に、わな

／＼震へて。

【お蔦】 えゝ、たとひ弱くツて震へても、貴方の身替りに死ねとも云ふんなら、喜んで聞いてあげます。貴方が死んだつもりだなんて、私や死ぬまで聞きませんよ。

【早瀬】 おゝ、お前も殺さん、俺も死なゝい、が聞いてくれ。

【お蔦】 そんなら、．．．でも、可恐いから、目を瞑いで。

【早瀬】 お蔦。

【お蔦】 ．．．

【早瀬】 俺と此ツ切別れるんだ。

【お蔦】 えゝ。

【早瀬】 思切つて別れてくれ。

【お蔦】 早瀬さん。

【早瀬】 ……

【お蔦】 串戯ぢや、ー貴方、無さうねえ。

【早瀬】 洒落や串戯で、こ、こんな事が。俺は夢に成れと思つて居る。

「跡には二人さし合も、涙拭うて三千歳が、恨めしさうに顔を見て、

【お蔦】 眞個なのねえ。

【早瀬】 俺があやまる、頭を下げるよ。

【お蔦】 切れるの別れるのツて、そんな事は、藝者の時に云ふものよ。……私にや死ねと云つて下さい。蔦には枯れる、とおつしやいました。

(ツンとしてそがひに成る。)

【早瀬】 お蔦、お蔦、俺は決して薄情ぢやない。

【お蔦】 え、薄情とは思ひません。

【早瀬】 誓つてお前を厭きはしない。

【お蔦】 え、厭かれて堪るもんですか。

【早瀬】 此方を向いて、まあ、聞きなよ。他に何にも鬱ぐ事はない、此の二三日、顔の色を怪まれる、屈託は此の事だ。今も言はう、此の時言はう、口へ出さうと思つても、朝、目を覺せば俺より前に、臺所でおかゝを掻く音、夜寝る時は俺よりあとに、あかりの下で針仕事。心配さうに煙管を置いて、考へると見ればお菜の獻立、味噌漉で豆腐を買ふ後姿を見るにつけ、位牌の前へお茶湯して、合せる手を見るにつけ、咽喉を切つても、胸を裂いても、唇を破つても、分れてくれとは言へなかつた。先刻も先刻、今も今、優しいこと、嬉しいこと、可愛いことを聞

くにつけ、云はう／＼と胸を衝くのは、罪も報いも無いものを背後からだまし打に、岩か玄翁で其の體を打碎くやうな思ひがして、俺は冷汗に血が交つた。な、こんな思をするんだもの、よくせきな事だと断念めて、きれると承知をしてくんない。．．．お前に、そんなに拗ねられては、俺は生きてる空はない。

【お蔭】 ですから、死ねとおつしやいよ。切れる、別れる、と云ふから可厭なの。死ねなら、あい、と云ひますわ。私や生命は借くはない。

【早瀬】 さあ、其の生命に、俺の生命を、二つ合せても足りないほどな、大事な方を知つてるか。お前が神佛を念ずるにも、先づ第一に拜むと云つた、其の言葉が嘘でなければ、言はずとも分るだらう。其のお方のいひつけなんだ。

【お蔭】 (消ゆるが如く崩折れる) え、それぢや、貴方の心でなく、別れる、とおつしやるのは、眞砂町の先生の。(と茫然とす。)

【早瀬】 己は死ぬにも死なれない。(身を悶ゆ。)

【お蔭】 (はつと泣いて、早瀬に縋る。)

一日逢はねば、千日の思ひにわたしや煩うて、
針や薬のしるしさへ、泣の涙に紙濡らし、枕を結ぶ
夢さめて、いとゞ思ひのますかゞみ。

(此の間に、早瀬、ベンチを立つ、お蔭縋る
やうにあとにつき、雙方涙の目に月を仰ぎながら
徐にベンチを一周す。お蔭さきに腰を落し、立てる
早瀬の袂を控ふ。)

【お蔭】 あきらめられない、もう一度、泣いてお
膝に縋つても、是非も爲やうもないのでせうか。

【早瀬】 實は柏家の奥座敷で、胸に匕首を刺され
るやうな、御意見を被つた。小芳さんも、蒼く成つ
て涙を流して、とりなしてくんなすつたが、たとひ
泣いても縋つても、こがれ死をしても構はん、おれ
の命令だ、とおつしやつてな、二の句は續かん、小

芳さんも、俺も疊へ倒れたよ。

【お薦】 (やゝ氣色ばむ) まあ、死んでも構はないと、あの、えゝ、死ぬまいとお思ひなすつて、・・・小芳さんの生命を懸けた、わけしりて居て、水臭い、藝者の眞を御存じない！私死にます、柳橋の薦吉は男に焦れて死んで見せるわ。

【早瀬】 これ、飛んでもない、お前は、血相變へて、勿體ない、意地で先生に楯を突く氣か。俺がさせない。待て、落着いて聞けと云ふに！ー死んでも構はないとおつしやつたのは、先生だけれど、・・・お前と切れる、女を棄てます、と誓つたのは、此の俺だが、何うする。

【お薦】 貴方を何うするつて、そんな無理なことばツかり、情があるなら、實があるなら、先生の然うおつしやつた時、何故推返して出来ないまでも、私の心を、先生におつしやつて見ては下さいません。

【早瀬】 血を吐く思ひで俺も云つた。小芳さんも、

傍で聞く俺が極りの悪いほど、お前の心を取次いでくれたけれど、一四の五の云ふな、一も二もない一俺を棄てるか、婦を棄てるか、さあ、何いうだ一と胸つきつけて言はれたには、何とも返す言葉がなかつた。今以て、いや、盡未來際、俺は何とも、他に言ふべき言葉を知らん。

【お蔭】（間。）あゝ、分かりました。それで、あの、其の時に、お前さん、女を棄てます、と云つたんだわね。

【早瀬】堪忍してくれ、済まない、が、確に誓つた。

【お蔭】よく、おつしやつた、男ですわ。女房の私も嬉しい。早瀬さん、男は・・・それで立ちました。

【早瀬】立つも立たぬも、お前一つだ。ぢや肯分けてくれるんだね。

【お蔭】 肯分け^{きんわ}ないで何^どうしませう。

【早瀬】 それぢや別^{わか}れてくれるんだな。

【お蔭】 ですけれど・・・矢張^{やつぱ}り私^{わたし}の早瀬^{はやせ}さん、
それだから尚^なほ未練^{みれん}が出る^でぢやありませんか。

【早瀬】 又^{また}、そんな無理^{むり}を言^いふ。

【お蔭】 どツちが、無理^{むり}だと思^{おも}ふんですよ。

【早瀬】 ぢやお前^{まへ}、私^{わたし}がこれだけ事^{こと}を分^わけて頼^{たの}む
のに、肯入^{きんい}れちやくれんのかい。

【お蔭】 否^{いへ}。

【早瀬】 それぢや一言^{ひとこと}、清^{きよ}く別^{わか}れると云^いつてくん
なよ。

【お蔭】
．．．．

【早瀬】 えゝ、お蔭。(あせる。)

【お蔭】 いひますよ。(きれ／＼に且つ涙) 別れる切れると云ふ前に、夫婦で、も一度顔が見たい。(胸に縋つて、顔を見合す。)

見る度ごとに面痩せて、どうせながらへ居られねば、殺して行つてくださんせ。

【お蔭】 見納めかねえーそれぢや、お別れ申します。

【早瀬】 (涙を拂ひ、氣を替ゆ。) さあ、此處に金子がある、・・・下すつたんだ、受取つて置いておくれ。(渡す)

【お蔭】 (取ると斉しく。) 手切れかい、失禮な、(と擲たんとして、腕の萎えたる状) あの、先生が下すつたんですか。

【早瀬】 まだ借金も残つて居よう、當座の小使ひ

にもするやうに、とお心づけ下すつたんだ。

【お蔭】（しを／＼と押頂く。）恚うした時の氣が亂れて、勿體ない事をしようとした、そんなら私、故と頂いて置きますよ。（と帯に納めて、落したる鬘形の包に目を注ぐ。ぞつと泣きつゝ拾取つて砂を拂ふ。）も、荷に成つて何故か重い。打乗つて行きたいけれど、それでは拗ねるに當るから。

【早瀬】で、お前は何うする。

【お蔭】私より貴方は……然うね、お源坊が實體に働きますから、當分我慢が出来ませう。

私……もう、やがて、船の胡瓜も出るし、お前さんの好きなお香々をおいしくして食べさせて饗められようと思つたけれど、……あゝ何も言ふのも愚痴らしい。あの、それよりか、お前さんは私にばかり我まゝを云ふ癖に、遠慮深くつて女中にも用はいひつけ得ないんだもの。……これからね、思ふやうに用をさして、不自由をなさいますな。……寝冷をしては不可ませんよ。私、山百

合を買つて来て、早く咲くの見ようと思つて、蒼を吹いて、ふくらまして居たんですよ、水を遣つて下さいな・・・それから。

【早瀬】（うつむいて頷いてのみ居る、堪りかねて）俺も世帯を持つちや居ないよ。お前にわかれて、何の洒落に。

【お蔦】 まあ、何うして。

【早瀬】 それでなくツてさへ、掏賊の同類だ、あひずりだと、新聞で囃されて、其處らに、のめ／＼居られるものか。長屋は藻ぬけて、静岡へ駈落だ。少し考へた事もあるし、當分引込んで居ようと思ふ。

【お蔦】 遠いわねえ。静岡ツて箱根のもツと先ですか。貴方が此處に待つて居て、石段を下りたばかりでさへ、氣が急いで成らなかつたに、また何時かお目にかゝれるやら。（と膝にうつむく。）

【早瀬】 お蔦、お前は、それだから案じられる。

忘れても一人でなんぞ、江戸の土を離れるな。静岡
は箱根より遠いかは心細い。・・・あゝ、親はな
し、兄弟はなし、伯父叔母と云ふものもなし、俺ば
つかりをたよりにしたのに、せめて、従兄妹が一人
ありや、俺は、こんな思ひはしやしない！・・・
よう、お蔭、そしてお前は當分何うするつもりだ。

【お蔭】（顔を上ぐ）貴方こそ、水がはり、たべ
ものに氣をつけて下さいよ。私の事はそんなに案じ
ないが可うござんす。小兒の時から髪を結ふのが好
きで、商賣をやめてから、御存じの通り、銀杏返し
なら人の手はかりませんし、お源の島田の眞似もし
ます。慰みに、お酌さんの桃割なんか、お世辭にも
譽められました。めの字のかみさんが幸ひ髪結をし
て居ますから、八丁堀へ世話に成つて、梳手に使つ
てもらひますわ。

【早瀬】 すき手にかい。

【お蔭】 えゝ、修業をして。・・・貴方よりさ
きへ死ぬまで、人さんの鬚を結ませう。私は尼に成

つた氣で、（風呂敷を髪に姉さんかぶりす。）圓髻に結つて見せたかつたけれど、一層此の方が似合ふでせう。

【早瀬】（其のかぶりものを、引手繰つてつゝと立つ）さあ、一所に歸らう。

【お蔦】（外套を羽織らせながら）あの・・・今夜は内へ歸つても可いの。

【早瀬】よく、肯分けた、お蔦、それぢや、すぐに、とぼ／＼と八丁堀へ行く氣だつたか。

【お蔦】えゝ、然うよ。・・・ぢや、もう一度、雀に餌が遣れるのね、よく馴染んで、連子窓の中まで来て、可愛いツたらないんですもの。・・・此まで別れるのは辛かつたわ。

【早瀬】何にも言はん。さあ、せめて、かへりに、好きな我儘を云つておくれ。

【お蔦】（猶豫ひつゝ）手を曳いて。

いへど此方は水鳥の浮寝の床の水離れ、よしあし原をたちかぬれば、

此の間に早瀬手を取る、お蔦振返る早瀬もともに、ふりかへり伏拜む。

さて行かんとして、お蔦衝と一方に身を離す。

【早瀬】 何處へ行く。

【お蔦】 一人々々兩側へ、別れたあとの心配をしみ／＼思つて歩行いて見ますわ。

【早瀬】（頷く。舞臺を左右へ。）

【お蔦】 でも、もう我慢がし切れなくなつて、私もしか倒れたら、駈けつけて下さいよ。

【早瀬】（頷く。）

【お蔭】 切通しを歸るんだわね、おもひを切つて通すんでなく、身體を裂いて分れるやうな。

【早瀬】 (頷く。) . . . お蔭をノノと行きかゝり、胸のいたみをおさへて立留る、早瀬ハツと向合ふ。 兩方おもてを見合はず。 . . .

實に寒山のかなしみも、かくやとばかりふる雪に、積る . . .

幕外へ。

思ひぞ残しける。
男は足早に、女は靜に。

— 幕。 —